

4. 文化財保護と文化育成 06.3,09,7

◇4.1 06.3

文化財保護と文化育成

文化財保護も含めて文化育成について、単に古いものを残すといった視点だけが特に目立つが、技術偏重ぎみの世の中だからこそ文化育成の視点が重要であるとして、生活に文化をもっと取り込むことを主張したくなった。

最近、ものについて「もったいない」という言葉が定着しつつある。しかしながら、依然として大量消費のムードが減速せず、リサイクル、リユース、リデュースといっても「もの」そのものの寿命があいもかわらず短く、こうしたことが文化の育成に大きな阻害要因にもなりかねないのではないかと危惧している。文化育成はその意味で高度文明社会の対極にあるともいえるので、文化の育成と保護という根源的な問題は、高度文明社会になればなるほど時代的な解決を必要としている。これには種々の立場の方々が事あるごとに種々の意見を発して対応していくべきであると考えている。こうした観点で少し私事を記す。

私は建築についてここ数十年教鞭をとってきており、若い人に生活空間の設計を教えているが、そこにおいて「人を愛し」「ものを大事に」といった姿勢が根幹であると力説している。しかしながら、若者にとっては文化についての感覚が多少疎く、例えば縄文式建築を見て何になるといったことを親とともに主張された方もおられ、その都度、文化の意味と育成について語り、「我らは文化の育成の延長線上で今日的に生産活動を営んでいる」と強調している次第である。こう考えると、文化育成は市民や子供ともども携わるべしとして、様々なところで様々なときに文化育成を細々とではあるが声高にせずにはおられない。

文化育成については、これまでの文化財を如何に保護していくかという大事な問題に加えて如何に文化財に親しんでいけるか（文化財を如何に生活に活用していけるか）という問題がある。最近、街づくりや住まいづくりの市民参加活動が盛んになりはじめているだけに、市民や子供の文化愛好（文化理解）の感覚が育てるという視点で保護の具体的な方策が検討されていけばと願っている。

私は文化財保護の専門家ではないが、教育を通して文化財に寄せる心意気を若い方や市民に伝えていければ、あるいはその逆を伝えていけば十分と思っている。文化財保護に際してのいくつかの思いを以下に列挙する。

- (1) 我らの生活空間にどう文化を根付かせるか、特に若い人のために
→施設設備の話になる。
- (2) 文化財をどう教育現場に持ち込んで愛好家（いや理解者）を育てていくか。
→初等中等教育で文化財教育ということである。
- (3) 文化を親しむことができるようなことは何か。
→市民教育、あるいは啓発活動ということである。

私は、若い方に教育の視点を通して文化の気質を浸透させ、文化財を大事にしていくように働きかけたい。また逆に、若い方の心意気をぜひとも文化財保護に反映できるようにつながればいいと思っている。我らの生活空間はいうにおよばず富山県全体が文化の空間となり、文化の香りのなかで健全に社会生活を営みたいものである。

◇4.2 09.07.17

文化（および文化財）がもっと市民の身近になるためには

文化について、専門的視点からではなく身近な市民生活の延長でフランクにかかわることが必要と考えて、教育の立場から具体的な提言を試みなくなり、筆を執った。

文化に造詣深い方々が率先して文化を創造し文化財を保全していく責務のあることはいうまでもないが、問題は文化を支えるあるいは文化の担い手である一般市民にとって、文化がことのほか縁遠い面が多々見られることである。昨今、文化立国、文化立県をとねえるならばなおさらのこと、市民に縁近いものとなるにはどうすべきかを、広く市民を巻き込んで考えていくことが肝要である。

今またなぜ文化が縁遠いといわれるようになったのか。いや文化財はしっかりと保全され、文化財を核にした観光は十分に成立しているのではないかと、といった意見があることは事実であるが、それでも日常において、我らの生活において文化財がどれほど寄与しているといえるのであろうか。（寄与して欲しいから逆説的問いかけをしているのである。）では、我らの生活はどうか、ふりかえてみると、我らは効率優先や利便性および欲望追求のいつてみれば今日的大量生産大量消費文化のなかで営んでいる。こうした営みの中では、今いう文化のみが唯一であり、これを越えたものあるいはこれまでのものは単に商品の一部といった感がすることもある。文化に縁遠いとは、まさにそのような状況をいうものである。

では、どうするのか。まずは、我らの生活が本当に今のままでいいのか、そんな根源的なところから考えていけば、おのずと大量生産大量消費文化ではなく、次にあるべき文化が造られるとともに、過去の文化がよみがえってくるのではないだろうか。

大上段に構えたが、要は、日常性に文化をどのように育てていくのか、ということにつくる。それには、教育の役割に期待したい。すなわち、自分らの住んでいるところに文化が感じられるようにすべきであり、また学校の初等中等教育において歴史教育などを含めて、生活感が漂うようなものであるようにすべきと思っている。たとえば、初等教育において一般教科(理科算数など)の場合でも、日常生活に立脚したストーリーとすべきであり、加えて自分らの住んでいる街においても生活感が街中に漂えば、それはとりもなおさず文化なのであり、ひいては、地域の文化保全というべきか、あるいは健全な地域づくりともいうべきか、そうした地域づくりの生活次元からの下支えそのものとなる。

そしてまた、我らの(文化に対する)姿勢を確たるものにした。先人たちから受け継いでいる姿勢は、今あるものがすべて

だめで昔に帰れとか、今までとは別にまったく新しく何かを作ろうといった二者択一論的なものではない。現在は過去の延長であり、将来は現在の延長であることを考えれば、大量生産の文化を経たからこそ、あるべき文化の姿が洗練されて造られるものがあるはずである。だからこそ、来るべき時代には、文化の人間の側面や、文化を担う精神性がもっと問われ、その意味では人間が一回りも二回りも精神活動の面で大きく進化しなければならぬといっても過言ではなかろう。こうした展開を可能にするには、やはり全国津々浦々、人間らしい生活を、言い換えれば健全な人間生活を営むことから始め、文化を創るといった感覚の定着が必要不可欠であると思っている。

こうした取り組みは、本当に多種多様な方々の集まりでもって推進され、おおきなうねりとしたいものである。